

滞在記

2017年度ネパールヒマラヤ滞在記

大田晃三郎¹

はじめに

2017年4月7日から5月3日まで(27日間)、ネパール・クンプ地方の氷河を対象に現地観測を行った。本調査の目的は、DGPS(Differential Global Positioning System)測量を行い、2007年と2016年に撮影された空撮写真からDEM(Digital Elevation Model)を作成するために必要なGCP(Ground Control Point)を取得することである。観測メンバーは、日本からは砂子宗次朗さんと大田晃三郎の2名。その他にシェルパのドミさん、ポーター1人の4人である。

カトマンズ探訪

これまで海外経験としてはプライベートでバングラデシュに滞在したことだけであった為、ネパールのしかも標高5000m近くの氷河に約1か月赴くことなど初めてであり、調査前は非常に不安であった。高校時代山岳部であったため、体力には自信があるが、高山帯特有の環境に果たして適応できるのだろうか。不安は的中し、その後たいへんな事態に陥ったのであった。

4月3日、9時30分セントレアから日本を出国し、17時50分ネパールの首都カトマンズ空港に到着。日本はまだ肌寒い季節であったため、一足先に暖かい空気をカトマンズで感じた。ホテルに着くとその日は移動で疲労していた為、深い眠りについた。次の日から調査前までのカトマンズでは、調査に必要となるソーラーパネルと充電バッテリーの接続の確認や、装備の買い出しといった事前準備やそれらの梱包、トレッキングエージェントの方との打ち合わせ、そしてカトマンズ大学の学生との研究に関する意見交換を行った。

モンスーン前のカトマンズはひどく乾燥しており、砂埃と排気ガスで空気が濁っているように感

じた。カトマンズの食べ物はおいしかった。滞在中に食べに行った激辛カレーは安価でとてもおいしかったのだが、辛すぎてその日は終日トイレにこもりっきりであった。このように5日間異国情緒を味わいつつも観測の準備をこなし、遂に調査へ出発する日が来たわけである。

ルクラ〜クムジュン

4月7日、カトマンズから飛行機で標高2800mのルクラ(Lukla)まで移動。カトマンズに比べると空気は澄んでおり、ほこりっぽい空気が苦手な私にとって快適ではあったが、日差しが強く、ああ山に来たのだなとしみじみ実感した。トレッキングしてまず感じたことは、そのスケールの大きさである。日本の緑生い茂る優しい・のんびりした雰囲気の間とは大きく異なり、目の前には氷河をかぶる急峻な山岳地帯が広がり、その圧倒的な迫力に魅了された。

ルート上のいたるところに配置された牛糞を回避しつつ、2日間のトレッキングを経て、標高3400mのナムチェ・バザール(Namche)へ到着した。そして村の発展具合に驚いた。日本であればすでに北岳を超えた標高にも関わらず、トレッキング用品店やATM、更にWi-Fiまで整備されていた。ただしWi-Fiは「Evelest Link」という各村で売っているカードを購入し使用するネット環境となっており、400MBで600ルピーであった。今回の調査は観光名所のエベレスト街道なので、宿泊はずっとロッジ泊であった。従って、食事もロッジで提供されているメニューを注文し、不自由なく美味しくいただいた。特にダルバートは格別においしくて、3度もおかわりをした。私は初めてのヒマラヤであったため、現地の物価を比較的すんなり受け入れたが、聞くところによると物価は昔に比べて格段に高くなったらしい。

¹ 名古屋大学大学院環境学研究所

2017年4月の時点でダルバートセットは700ルーピーほどかかり、標高が高くなればなるほどこの価格も上昇していく。

トレッキングは順調に進み、4月9日、標高3800mのクムジュン(Khumjung)という村へ到着。この時ロッジで昼食を食べていた私に別の登山グループのシェルパがネパール語で話しかけてきた。どうやら地元の人と間違われたらしい。確かに私は地黒で濃い顔をしているため、過去いろんな方々にタイ人やインドネシア人だと言われていたが、本国の方に間違われるようになったらもう認めざるを得ず、心身ともにネパールに染まっていたのであった。

クムジュンからGPS測量を開始するために、村のロッジの一角に基地局としてGPS機器を設置させてもらった。この基地局はGPS測量を終えるまで約4週間稼働させ続けなければならず、バッテリーが尽きて停止してしまうと、すべてのデータが水の泡になりかねないとても重要な装置であった。よって、GPS機器を最後まで運用するためのソーラーパネルの配置には最新の注意を払い、チェックを何度も行った。こうして本格的な調査が始まった。

ディンボチェ — 高山病の発症 —

クムジュンを出発してからは、移動局としてGPS機器をザックの脇に取り付けて移動する。調査は基本3人のパーティで動いていたため小回りが利き、快適にトレッキングを行う事が出来た。標高3880mのタンボチェ(Tenboche)という村に着く頃には、視界にエベレストやアマ・ダブラムが姿を現しており、いよいよだなどと気合が入る。しかし乾燥のため、この時点から砂埃がやけに多くなった。埃が苦手な私はすぐに対策をしたかったが、あいにくバンダナを用意しておらず、花粉症用の特殊なマスクしか所持していなかった。そのため、マスクを着用して行動しようとしたのだが、砂子さんに「今マスクなんかして山に登ったら、高山病になって危ないぞ」と指摘され、やむなくマスク登山は中止となった。

4月11日、タンボチェからチュクン氷河手前、標高4410mのディンボチェ(Dingboche)へ向かう。このディンボチェという村で2日間高所順応

を行う予定となっている。足取りは順調、何事もなく目的地へ到着し、宿でくつろいでいた。しかし、徐々に頭痛が激しくなってきたかと思うとき気が一気に押し迫ってきた。高山病である。急な発症に戸惑いを隠せず体調はさらに悪化、その日は1日寝込んでいた。高山病に関してはこの日が調査の中でいちばん様態が悪かったと今では思う。次の日からは様態は落ち着いた。体調も回復し、4月12日に予定通りディンボチェを出発。最初の調査対象であるチュクン・イムジャ地域の氷河へと向かった。

チュクン調査 — GCP 達とご対面 —

チュクン(Chukhung)の宿に到着した我々は昼食を食べ、午後より早速本調査の目的であるGCPの取得のため氷河周辺へ赴いた。GCPの取得は調査前にあらかじめ作成したGCPリストとハンディGPSの位置情報を頼りに対象物を特定する。目的の対象物は、過去に約9000~10000m上空から撮影された写真で見た、氷河外にあるコメ粒ほどの大きさの岩などの特徴的なものである。リストを作る時はそんな米粒ほどの岩を4か月かけて探し出すなど、非常に苦労したのを覚えている。なので現地で実際にお会いするとみると、憧れのアイドルといざ対面するような心持と一緒に少し感慨深くなると思っていた。しかし、いざ現物にお会いすると彼女たちはなかなか大きくそのほとんどが2m以上あった。自分の背丈の2倍以上ある岩をボルダリングの要領でGPSを背負いながら登り、岩の頂上に立って観測を行う。降りるのも一苦労で1つのGCPをとり終わるころには軽く息が上がる。調査前にリストアップしたときはGCPを120点ほど取得する予定だったので、これは途方もない作業だと覚悟した。しかし測量自体は楽しかった。その日は7点取得し、無事帰路に就いた。

4月15日はかなりの降雪に見舞われた。そのおかげで体は芯から冷え、更には積雪によりGCPを見つけることが困難となり、8点取得予定のところを3点しか取れず、予定が大幅に遅れてしまった。その日の午後、ベンチマークを取得するためイムジャ氷河湖末端の左岸側にある丘へ登る途中、疲れとともに再度頭が痛くなり、吐き気に

襲われた。こうなってしまっただけは動くのもつらい。そこで、まだ残っていたベンチマークの取得を砂子さんに託し、ドミさんと一緒に先にチュクンのロッジへと引き返した。結局その日中に体調は回復せず、残りのチュクンの観測中、私はずっとロッジで待機する結果となった。情けない。仕事と言えばソーラーバッテリーの充電を確認するだけである。しかし泣き言ばかり言っていられない。回復したら今度は自分が頑張ろうと意気込みチュクンを後にした。

クンプ調査～チョーラパス

— beyond the 雑菌 —

4月17日、標高4620mのクンプ氷河末端に位置するトゥクラ(Thukla)に到着。山に入ってから10日目である。服から何やら芳しい臭いが漂い始めている。2月18日朝7時、トゥクラを出発し、2時間かけて宿泊地である標高4910mのロブチェ(Lobche)へ到着。午後からクンプ氷河のGCP測量を開始した。今回は私が主体となり、クンプ氷河左岸のポイントから攻めにかかった。チュクンで2日間休んだ甲斐もあり、非常にスムーズな足取りで目的のGCPを取得していく。一方砂子さんは、氷河内で赤外線カメラを使った観測を行っていたが、これまで私の代わりに頑張っていた分だけの疲れがピークに達し、寒空の中サイドモレーンの巨石の上で昼寝をし、風邪をひいていた。2月19日、砂子さんは回復していたが、もう少し休んでいただき、私とドミさんの二人でクンプ氷河右岸側のGCPを取得し、今回の観測で一番標高の高い5140mのゴラクシップ(Gorak shep)にあるロッジへ到着した。午後からはさらに上流のベースキャンプ近くまでベンチマークを取得しに行った。ベースキャンプは氷河内にテントがいくつも点在しており、沢山のトレッカーがいた。ここから目の前にある山頂に向かうのだと思うと身震いした。すでに高山病に悩まされていた私にとって現地から更に3000mも登るなど考えられないからだ。ベンチマークと残りのGCPを取得し無事その日の調査のノルマは達成した。砂子さんも全回復し(半日で治すところはさすがである)、1000ルピーするダルトを食べぐっすり眠りについた。2月20日

は来た道に戻り、一行は今回一番の難所となるチョーラパス(Chola)の手前標高4830mのゾンラ(Dzonglha)まで移動した。ここからが正念場となる。

2月21日、6時半にゾンラを出発。天気は快晴で登山日和である。標高5330mのチョーラパスまでは非常に急峻な斜面を登っていき、なかなか手強い印象があった。更に山頂直前には小氷河があり、一度滑ると二度と帰れないほどの危険な道を慎重に歩いた。こうして10時過ぎにチョーラ山頂へ到着。東を見渡すと雲海の中からアマ・ダブラムが鎮座しており、非常に幻想的な景色を堪能した。山頂でお昼休憩をし、再度行動開始。一気に山を下り以降はゴジュンパ左岸のドラグナグ(Drag Nag)に向かう。しかしこの道中、水分をこまめに摂っていたにもかかわらずまたもや体調が優れなくなる。13時過ぎ、何とかドラグナグへ到着。その後すぐ私は3度目のダウン。その日はゆっくり休養し、いよいよ観測の後半戦となるゴジュンパ氷河のGCP取得に向かう。はずだったのだが。

搬送、入院、養生、そして帰国

4月22日、その日は突然やってきた。朝起きると先日の疲れが残っているのか、微熱で体がだるかった。その日は砂子さんに「休んでおけ」と言われ、観測隊を見送ってから再度ベッドに入り就寝。11時頃、目を覚ますと一気に体が重くなり、咳がひどくなる。体温計を見ると、39.5度を示していた。トイレに行こうと部屋から出ると、頭がくらくらして、立っているのもやっとであった。これはまずいと思い、ロッジの経営者に体調が悪い旨を伝えた。幸いにもその方は夏に日本の立山の山小屋で20年間アルバイトをしている方だったため日本語が流暢であった。事情を聞いてもらい、ロビーの暖炉の前で横になって観測隊の帰りを待っていた。お昼に観測隊が帰ってくると、とんとん拍子に話は進み、結果私はヘリで搬送されることになった。急な調査断念の知らせには正直泣きかけた。雪の降るゴジュンパの寒さが身体に堪えた。

4月22日、午前10時半に私はヘリに拾われ、同じような症状の2人のハンガリー人カップルと



図 1 GCP 取得の様子.



図 2 ヘリで運ばれる私 (砂子さん撮影).

1 人のカリフォルニア出身のご高齢の方とカトマンズ空港まで搬送された。午後空港に着いた私はすぐ救急車で病院へ直行、カトマンズで一番良いと言われる ciwec clinic という海外のトレッカー専用の病院に 3 日間入院した。入院初日は検査を行いひとまず病室で安静する。しかしさすがカトマンズ。夕食には当然のごとくカレーが運ばれてきた。私はこれまで入院というものをしたことがなかったので、「へえ、入院中も普通の食事なのか」と思っていたが、どうもそうではないようだ。確かにカレーを食べた後、あまり体に合わずトイレに何度かこもったものである。病院のスタッフもそれを気にしてか、以降は出前で日本食を頼むことになった。それにしてもカトマンズの病院というものは不安要素がいっぱいである。咳がひどいので、肺をきれいにするために吸入器を用いて薬を吸い込むのだが、その薬は紫色の液体で、何という名前かもわからずに、むせながら入院中吸い続けていた。一番衝撃だったのは、病院の管理体制である。退院日、血液検査を行うため朝、看護婦さんが採決に来る。その 30 分後、他の看護婦さんが再び採血をしようとする。いや、もう採血したのだがと伝えたところ、「あ、ホント？ ゴメンゴメン」的な雰囲気に戻っていった。もうカトマンズの病院にお世話にならないぞと決心した瞬間である。

3 日間で咳以外は回復し、無事退院。その後帰国までの一週間はトレッキングエージェントの

JP ラマさんのご家族の家に滞在させていただいた。JP さんの奥さんは非常に優しい方でご飯もとてもおいしかった。3 人のお子さんたちとも仲良くさせていただき、(砂子さんには申し訳ないが)パタンなどの観光名所を巡ってじっくりと養生をした。そして当初の予定よりも 1 週間早い 5 月 1 日にカトマンズを出発し翌 5 月 2 日、日本へと帰国した。調査は砂子さんが後半の 2 週間頑張っていたが、全部で 82 点の GCP を取得した。本当に感謝しかない。

これが私の 1 か月間に及ぶ調査の全貌である。なかなか貴重な経験をしてきた私であるが、無事研究も進み、現在は元気に暮らしている。結論として、私は高山帯には合わない体質であったのだと言える。しかしまたいつかネパールに滞在するような事があれば、決して病院のお世話にならないよう体調管理だけはしっかりして、再びあの雄大な氷河を見に行きたいものである。

謝 辞

名古屋大学の藤田耕史准教授には、調査への機会を与えていただき感謝いたします。最後に、平成 29 年度井上フィールド科学研究基金の旅費の一部として使わせていただきました。記して感謝申し上げます。

(2018 年 2 月 7 日受付)